日本にゴルフ文化は根付くか：その歴史・文化・環境問題
Does the golf culture take root in Japan?: The history, culture, and environmental problems

1K06B174　　橋本　翔太
指導教員　主査　志々田文明先生　　副査　宮内孝知先生

【はじめに】

石川遼。彼の名前を知らない日本人は少ないだろう。日本プロゴルフ界において、１０代で初の賞金王に輝いたプロゴルファーだ。現在、日本のプロゴルフ界には彼以外にも、若いゴルファーの活躍が目立っている。テレビ、新聞、雑誌、インターネットなど、ありとあらゆるメディアが彼らを取り上げることで、昨今の日本人はゴルフに多かれ少なかれ関心を寄せているのではないだろうか。

日本のゴルフは未熟だといわれる。それは、単に技術のことを示すのではなく、ゴルフ文化が根付いていないという意味で用いられることが多い。筆者は日本にゴルフ文化が根付くことを望んでいる。その理由は、メリットとしてゴルフが地域社会の活性化や世代を超えた交流のきっかけとなること、石川遼のような新たなスター選手の誕生などがあると考えている。本研究の目的は、ゴルフ文化が日本に根付く可能性を探ることにある。そのために、ゴルフの歴史的背景、文化的側面、環境問題から考察を行った。

【各章の要約】

１章では、ゴルフ競技自体の理解を深めるため、まずゴルフの競技特性と精神性を探った。次に、ゴルフがこれまで歩んできた歴史的背景を、発祥、発展、ビジネス化の３つの観点から概観した。ゴルフの競技特性として特筆すべき点は審判の必要が無いところである。そこにゴルフの難しさがあり、他の競技との大きな違いが生じる。ゴルフをプレーするプレーヤーは自分で自分を審判し、律する精神が重要になる。そこに、ゴルファーズオネスティ（うそをつかない）という精神性が生まれるのである

２章では、ゴルフ文化とは何かを考えるために、まずゴルフの文化性について考察した。次に、スコットランド、アメリカ、日本の３カ国におけるゴルフの文化性を、会員システム、クラブライフ、ビジターの受け入れ、地域における役割の４つの観点から概観し、日本におけるゴルフが改善すべき点、見習うべき点などを考察した。他国と比較して日本のゴルフが特に劣っていると感じたのはゴルフ場の閉鎖性だった。

３章では、ゴルフ場のもたらす環境問題を確認するとともに、ゴルフ場がもつ環境機能を考察した。まず、ゴルフ場が環境に及ぼす危険性について考察した。次にゴルフ場が環境に好影響を与える要因となる可能性について考察した。環境とゴルフ場が共存することは可能であると考え、ゴルフと環境の新たな関係に期待している。

【結論】

本研究を通して、日本にゴルフ文化が根付くことは難しいという考えに至った。その理由は日本のゴルフ、ゴルフ場が抱える問題が多くあることだ。しかし、それらの問題に対して改善につなげる努力がなされているケースは非常に少ない。ゴルフが事業になっていることや間違

ったルールを当たり前のように採用していること、プレースタイルの選択肢が少ないことや、ゴルフ場が閉鎖的であることなどがその例として挙げられる。

日本のゴルファーは知らない間に、大前提であるゴルフ規約に従わない行動をとらされているケースがある。間違ったルールの下でプレーすることや、事業としてのゴルフをプレーする日本では、ゴルフをあるがままに体験することはできない。これは、日本のゴルフが営利主義的のもとで発展してきた歴史的背景があるが、ゴルフ文化を根付かせるためには、これが大きな障害となるだろう。

ゴルフの基本的原則はあるがままにプレーすることである。日本のゴルファー達が、ありのままのゴルフをプレーできる日が来れば日本にゴルフ文化が根付く日はすぐそこまでやってきていることだろう。